



本冊子の情報は2023年4月現在のものです。最新の情報は文学部ホームページや掲示などで確認してください。

文学部とはどういうところか

文学部 古い伝統と新しい魅力と

文学部でなにを学ぶか。すでにある程度はご存じかもしれません。

哲学、宗教学、日本史学、考古学、言語学、英米文学、フランス文学、心理学、社会学——こうした多くの学問分野の名前はすでに馴染み深いものでしょう。そのうちのいくつかについてなら、教養課程の講義や参考書をとおして、概要くらいは学んでいることでしょう。

左ページの表にあるように、文学部には 27 の専修課程があり、それぞれ伝統的な、あるいは新たな学問分野をその名称に掲げています。多くはすでに明治の頃に創設され、以来、おのこの領域で、日本の人文・社会科学をリードする役割をはたしてきています。

それでは、文学部で、いま、どのような授業がおこなわれているのでしょうか。これまでに文学部に接する機会のなかった学生さんは、左ページの表といままでの知識に照らしあわせ、文学部とは伝統的な学問を昔ながらのかた苦しい方法で学ぶところだと考えるかも知れません。しかし、それは認識不足というものです。

文学部の授業はおどろくほど多様で、毎年 800 近い講義や演習が開講されています。「無宗教の宗教学—「虚構」の力—」「都城からみる中国古代史」「デジタルゲームの感性学」「近世怪談研究」「英米詩入門～出会いと別れの詩」「運動と認知の脳科学」「共感とケアの哲学」など、今年開講される予定の授業題目を手あたり次第に取り出してみただけでも、文学部の学問領域の気の遠くなるほどの広さがおわかりになると思います。さらに、大学院人文社会系研究科では、文学部のさまざまな研究領域や学内の諸研究機関を学際的につなぎ、学外の文化行政機関や文化施設などとも連携して、文学部の有する豊かな知見を積極的に社会に向けて開き、生かしてゆくために、2000 年度から文化資源学、2002 年度からは韓国朝鮮文化とい

う新しい研究専攻が開設されました。これらは学部学生を持たない大学院だけの独立専攻ですが、文学部のどの専修課程からも進学することができますし、いくつかの授業は学部・大学院共通科目として文学部にも開講されています。さらに 2005 年度には、人文知の新たなかたちを探る先端的な研究組織として「次世代人文学開発センター」が創設され、ユニークな研究を展開しています。2007 年度には文学部の西洋近代語近代文学専修課程を改組した現代文芸論専修課程も発足しました。

文学部の各専修課程は、それぞれが確固たる基盤の上に立ちながらも、伝統的な学問の枠組みに縛られることなく、学問の新しい動向を見定め、その成果を授業に反映させています。今日、さまざまな新しい学問分野が生まれていますが、文学部はつねに豊かな発想の源泉となっています。

文学部のしくみ

まず、文学部の組織についてご説明しましょう。最も基本となる単位が専修課程です。しばしば「研究室」とも呼ばれる専修課程は、それぞれ、学問領域も伝統も気風も大きく異なります。文学部では、各専修課程の独自性が可能なかぎり尊重されてきました。したがって、文学部は 27 の専修課程に分かれているというよりも、27 の専修課程が集まって文学部を構成しているといったほうが、イメージとして適当かもしれません。

文学部・大学院人文社会系研究科には、国際交流室、情報メディア室、視聴覚教育センター、次世代人文学開発センター、北海文化研究常呂実習施設という 2 つの室と 3 つの附属施設があります。学生がこれらに所属することはありませんが、これらの施設は専修課程とは違った観点から多様な授業を提供したり、皆さんの勉学を支援したりします。情報メディア室では、教育研究用のコンピュータシステムやネットワークの運用・管理を行っていますし、視聴覚教育センターでは研究・教育において視聴覚機器や視聴覚資料が活用できるよう設備整備や利用サポートを行っています。文学部で営まれている学問は、長い伝統に従うばかりではなく、新しい研究のための情報や手段を貪欲に取り込んでいるのです。

さて、文学部に進学するという事は、正確に言うなら、いずれかの専修課程に進学することを意味します。次に、その専修課程について説明しましょう。

専修課程とはなにか

専修課程は教員（教授、准教授、講師、助教等）と学生（大学院学生、学部学生、研究生）によって構成されます。厳密に言えば、学部（文学部）と大学院（人文社会系研究科）は別組織ですが、文学部の各専修課程は大学院の各専門分野と不可分の関係にあるので、この両者をひっくるめた、いわゆる研究室ということばが広く使われています。たとえば文学部の西洋史学専修課程と、大学院の西洋史学専門分野をあわせて、西洋史学研究室と呼ぶのはその一例です。研究室の規模はさまざまで、大きいところでは教員・学生の総数が100名を超えることがありますし、総数が10名ほどのこじんまりとした研究室もあります。

研究室ということばにはもう1つ別の意味があって、それは文字どおり、教員と学生がともに研究を進める部屋を指します。

毎年5月、教養学部前期課程学生向けに「文学部ガイダンス」という集まりが開かれます。そこで配布される文学部紹介冊子を見たり、もし暇があるなら、ぜひ一度本郷キャンパスを訪ねたりしてください。

文学部、特に法文2号館の建物は複雑怪奇で、教室、演習室、研究室の事務室、教員の個人研究室、会議室、さらにはいったいなにに使われているのか、いつもひっそりと扉を閉ざした小部屋などが、迷宮のように並んでいます。

ところどころにあらわれる階段を上り、また降り、幾度か廊下を曲がるうちに、慣れないあなたは自分がいったいどのあたりにいるのか、方向の感覚を失うことになるでしょう。それでもいくつか、「哲学研究室」「美学藝術学研究室」などといった昔からの看板をみつけたら、どこでもよい、思い切って中をのぞいてみて下さい。扉を開けると、まずは壁一面に書物のつまった本棚が目につくはずです。さらに書類戸棚やついたての奥に、いくつかの部屋の扉が開いているのが見えることでしょう。これが、文学部に進学したら毎日のように通う、研究室というところなのです。

研究室とはどのようなところか

研究室ごとに呼び方はまちまちでしょうが、どんな場合でも入ってすぐのところ、辞書室あるいは参考図書室という大きな部屋があって、授業

の下調べや発表の準備をするには欠かせない書物が並んでいます。

これは、各研究室が、その創設以来何十年にもわたって揃えてきた基本的な参考書の一大コレクションであり、なかには、第二次大戦中にミカン箱につめられて田舎に疎開したというような、数奇な運命を閲した書物もまじっています。また、Amazon などには見当たらない、珍しい新着の外国書が含まれているかもしれません。どの辞書が必要か、どの書物が便利か、——そうした知識は一朝一夕にして得られるものではなく、少し大げさになりますが、やはり研究室の歴史の積み重ねの中で蓄えられてきたのです。あなたは、諸先生、諸先輩が苦心して揃えたノウ・ハウの成果を自由に利用できるし、また、大いに利用しなくてはなりません。こうした参考書の使い方に慣れること、——これが、あなたの文学部における勉強の第一歩となることでしょう。

ところで、研究室の中に特別に演習室を設けている専修課程も少なくありません。演習は講義と違い、小規模で親密な雰囲気の中で進められます。文学部は伝統的に演習を重視してきました。あなたはいくつかの演習に参加して勉強することになるでしょうが、これは、専門研究の手ほどきを受ける場であり、同時に、発表を通じて自己の能力を高め、アピールする場でもあります。わずか数人の仲間とともに受ける演習の授業から、生涯の友情が生まれることもあります。もっとも、予習を怠って身のおきどころのない1時間45分を過ごすこともあるかもしれません。

文学部の各研究室はそれぞれの分野において日本の人文社会学研究で中心的な位置を占めています。多くの研究室は関連した学会の運営に携わり、研究室のOB、OGたちは全国各地で研究の第一線に立ち、海外の研究者や留学生との活発な交流が行われています。こうしたネットワークを通じて入手できる研究情報は、多くの場合、日本で最新かつ最良のものであって、東京大学文学部で学ぶことの最大の魅力とメリットはこの点にあるといってもよいくらいです。講演会やセミナーは頻繁に開かれていますから、ぜひ積極的に参加してください。

どの専修課程に進むか。どの研究室の扉をたたくか。それは、あなたの勉学と生活の両面に深く関わる問題です。あなたの一生の何がしかが、そこで決まるかもしれません。ですから、教養課程における成績の平均点や目先の流行だけにとらわれず、ぜひ、じっくりと考えて下さい。学問は自身の人生そのもののありように関わるものであって、決して偏差値的な世

界ではないのです。この『PROSPECTUS』では、それぞれの専修課程の紹介にもっとも多くページをさいてあります。その説明でも足りない場合は、このパンフレットの巻末の、「さらに詳しく知るために」、「専修課程への問い合わせ」などのページを活用したり、文学部のホームページ (<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/>) を検索したりして、どうか心ゆくまで情報を集めてください。

助教 研究室のジェネラル・マネジャー

ところで、あなたが文学部に進学して研究室に足を踏み入れた時、そこであなたを誰よりも先に、おそらく気さくな笑顔で迎えてくれる人（あるいはブスツとしているかもしれませんが、実はとてもいい人だったりします）、そう、「助教」のことを忘れるわけにはいきません。

それぞれの研究室は、読書会や研究会の世話、研究室紀要の編集、図書購入の選定、蔵書のインスペクション、研修旅行の手配、学生の一身上または研究上の相談ごとへの対応など、驚くほど多くの、専門的な知識を必要とする仕事を抱えています。文学部において助教は、教授や准教授と共同で授業を担当することがありますが、主に、このような微妙で複雑な仕事を処理しながら、研究室が円滑に運営されるように絶えず気を配っているのです。まさに、研究室のジェネラル・マネジャーなのです。

助教の年齢はおおむね二十代後半から三十代前半。あなたにとっては兄貴分にも姉貴分にもあたる年ごろです。研究室を下見する機会があったら、あなたもこの助教の人たちに研究室の様子を聞いてみたらどうでしょう。昨今、多くの大学では助教の定員が削減されて従来の研究室のあり方を維持するのが難しくなるような状況が生じていますが、文学部では今でも多くの助教が活躍して、豊かな知的交流の場としての研究室を保っているのです。

多彩な授業 4つのタイプ

文学部では毎年 800 近い講義や演習が開講されます。授業の担当者は、専任の教員も非常勤講師も、それぞれの分野を代表する一流の研究者であって、その教員が、あるいはそれぞれの分野の基本的・伝統的な問題を、

あるいは現在取り組んでいる研究の最新の成果をあなたに伝えるのです。それらの講義や演習は4つのタイプに分類できます。

第一は各専修課程の枠組みの中で行われる授業で、いずれも高度の専門研究の上に立ったものですが、新しい学問の動向をも見定めて、その成果を折りにつけ取り入れていることは、この『PROSPECTUS』やUTASのシラバスをご覧いただければ一目瞭然です。もちろん、他の専修課程の授業にも原則的には出席することができます。それぞれの専修課程が、どのような方針で講義や演習を編成しているのかについては、専修課程紹介のページを参照してください。

第二は「共通科目群」です。これには「アカデミック・ライティング」と「多分野講義」が含まれます。

「アカデミック・ライティング」の教育プログラムは、しっかりとした学術論文を外国語で発信するために必要な知識を身につけてもらうための授業です。今後、みなさんが研究者として、あるいは社会人として、世界に向けてきっちりとした主張をするための貴重な手立てとなってくれることは間違いありません。

「多分野講義」は学問が学際的な性格を急速に強めている最近の状況に対応するために設けられたもので、複数の専修課程にまたがり、さまざまな専門分野を横断する内容の問題を取り扱う講義と考えればよいでしょう。今年度は、「"Explaining" Japanese Religion: A Critical Approach」「Image and Text: Ideas of Afterlife in Ancient Mediterranean」「メディア間翻訳・翻案研究：文学テキストの映像化・舞台化」といった講義が用意されています。

第三は、「人文学フロンティア教育プログラム」です。これには、「死生学・応用倫理教育プログラム」と、文化資源学研究専攻が開講する学部・大学院共通科目の一部、次世代人文学開発センターが開講する科目の一部が含まれます。

「死生学・応用倫理教育プログラム」は死生学と応用倫理に関する学際的教育を構築するために開設されました。生死をめぐる問題は、どんな時代の、どんな地域の人々にとっても、抜き差しならぬ課題でありつづけ、時代を超え、地域に限定されることのない普遍的な問いです。しかしそれは一方で、けっして観念的、抽象的な問題として提起されてきたのではなく、いつでも特定の時と場所に限定された、具体的な問題として現れ

てきたのも事実です。この現代という時と場所にあつて生死の問題は、主題としては遺伝子操作の問題から、安楽死や尊厳死、臓器移植、さらには異なった世界観の間に生まれる軋轢として、また次元としてはミクロな分子レベルから、身体、地域、さらには地球、近隣宇宙というマクロな次元までのさまざまな問題と密接に絡み合つて現れてきています。それは古代の思想、宗教、哲学が潜在的な形で問いとしてきたものが、具体的な、目に見える形の、個別の問いに姿を変えたものにほかなりません。2002年度より文学部は、各方面から第一線の先生たちを招いて、古代の問題と現代の問題とを同時に見つめていく大切な試みを始めています。2022年度から、大学院の基礎文化研究専攻において死生学応用倫理専門分野も開設されています。みなさんの積極的な参加を期待しています。

第四は「共通講義」です。これには、「一般講義」「外国語」「原典を読む」のほか、文化資源学研究専攻・韓国朝鮮文化研究専攻が開講する学部・大学院共通科目の一部、次世代人文学開発センターが開講する科目の一部が含まれます。

「一般講義」はそれぞれの専修課程の枠組みには収まりきらないが、それでも多くの学生にとって必要と判断されるテーマが取り上げられ、学部外から専門家を招いて講義されます。今年度は、「情報メディア論」「文化人類学」「地理学」「博物館資料論」「精神療法」「電算機応用」「書道」「漢文学」「法律学」「地誌」などが開講されます。

「外国語」は外国語の運用能力を身につけるための授業です。何といても文献解読が研究の出発点となる文学部では、外国語の運用能力を身につけることがぜひとも必要です。しかしそうはいっても、教養課程で語学の授業をさぼった、文学部に進学してはじめて語学の重要性を悟った、あるいは専修課程の授業に接して、新しい外国語の知識が必要になった、というような学生が、現実には少なくありません。そのため文学部では、英語、ドイツ語、フランス語をはじめとして、中国語、ロシア語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語、ヒンディー語、韓国朝鮮語、アラビア語、ペルシア語、ギリシア語、ラテン語、チベット語という外国語のメニューを組んでいます。専修課程の授業での必要にせまられた人たちが受講するのですから、その取り組み方も必死で、短期間で大きな効果をあげているようです。

「原典を読む」は文献を原文で読みたいと望む全学の学生を対象に、言

語・文学を専門とする教員が味読の手ほどきをするものです。今年度の開講予定については本文の「原典を読む」をご参考ください。

カリキュラム 専門性と学際性

文学部を卒業するためには 76 単位を取得することが必要ですが、その内容は専修課程によって異なります。詳しくはそれぞれの専修課程紹介のページを参照していただきたいのですが、概していえば、ほぼ半数程度の単位を必修科目で満たすことを要求し、残りの半数を学生の自由な裁量にゆだねている専修課程が多いようです。たとえば『文学部便覧』の専修課程必修科目の欄から、哲学専修課程の必修科目をみてみましょう。

もちろん、実際の履修については専修課程からの具体的な指導があることですが、76 単位のうち、右の表に示された内訳

必修科目	単位数
哲学概論	4
西洋哲学史概説第 1 部	4
西洋哲学史概説第 2 部	4
哲学特殊講義	12
哲学演習	8
卒業論文(卒業論文指導を含む)	12
	44

で 44 単位は必修科目を修める必要があります。しかし、必修科目といっても、必ずしもその専修課程の授業に限られるわけではなく、関連した専修課程の授業も、その専修課程の必修科目として認める場合があります。たとえば哲学専修課程は、倫理学専修課程や宗教学宗教史学専修課程などのいくつかの授業を「哲学特殊講義」の単位の中に含めているのです。

こうした措置は、ほとんどの専修課程によって取られています。実際には自分の専修課程の授業だけで手一杯で、他の専修課程の授業にはとても手が出せないことになるかもしれません。しかし、原理上は、半数近くの単位を他の専修課程の授業で取ることが認められているのです。文学部の学生の履修科目選択の自由度は、他学部の学生に比べてかなり高いといえます。

おそらく来年の 4 月、あなたは文学部の 800 にのぼる授業を前に、どの講義を聴講し、どの演習に参加するか、頭を抱えて悩むことになるでしょう。それは、学問のデパートともいえるべき多様な授業内容を誇る文学部の学生のみならず、そして奨励されている贅沢な悩みなのです。いま、いろいろなところで、インターディシプリナリティ（学際性）などということが叫ばれていますが、こうした言葉の流行するはるか以前から、文学部

では、あなたの先輩たちが、一方で高度な専門性を身につけながら、他方では一見専門から離れた多様な授業を履修することによって、インターディシプリナリーな活動を実践してきたのです。学際性というものは、しばしばイメージされるように、いろいろな分野の専門家が集まって交流すれば達成されるなどという安易なものではありません。様々な学問領域の間の重なり方やずれ方を一人一人が身をもって体験し、結びあわせる過程を通して、自らの専門領域での問題関心や視野を広げてゆくこと。学際性とはそのように個人の中で、あくまでも専門性との関わりの中で現実化されてこそ力を発揮するものなのです。文学部のカリキュラムはそういう積極的なチャレンジ精神をもって自らの可能性を広げてゆこうとする人の期待に応えられるだけの多様な可能性を提供しているのです。

たとえば、あなたがヨーロッパ中世に興味を抱いて、西洋史学専修課程に進学を考えているとしましょう。あなたは、まっさきに便覧の西洋史学専修課程の項目を開いてみることでしょう。そこには西洋のさまざまな地域と時代を扱った授業が並んでいて、履修する科目を選り分けるのに楽しく迷うことになりませんが、それだけではないのです。

日本史学や東洋史学の中にも中世史の授業がある。言語や文学を専門とする専修課程も、それぞれヨーロッパ各国の中世語や中世文学の授業を提供している。美術史学の中世関係の授業も、文化史的な知識を得るためには欠かせないところだし、さらに思想を専門とする専修課程の講義にも出て、ヨーロッパ中世思想を理解する手がかりを得たい。——と、こんな具合に、研究の夢は四方八方へと広がります。そして、そのプログラムを自由に組み立てるのは、ほかならぬあなたなのです。

卒業論文 知の受信者から発信者へ

文学部における学生生活を締めくくるのは、卒業論文です。それはあなたの学業の総決算でもあります。

卒業論文を完成させるということは、決して簡単なことではありません。論文のテーマをさがし、そのテーマに関連する先行の研究を調べる。必要な文献資料を読んだり、あるいは実地の調査や実験をおこなったり、集まったデータを分析・検討した上で、思いをめぐらし、工夫をこらし、何らかの結論をもった、かなりの分量がある論文にまとめあげなくてはならない

のです。量的変化は質的变化をともしません。今までにレポート程度のものしか書いたことのないあなたには、あるいは溜め息の出ることかもしれません。

しかし、心配することはありません。先輩たちの多くが、立派な卒業論文を書いて卒業していきました。文学部に進学したばかりの頃には教員をハラハラさせた頼りなげな学生が、1年、2年と演習で鍛えられるうちに実力を身につけ、そして堂々たる卒業論文を完成させる。こうした例を、多くの教員が経験しています。文学部の雰囲気親しむ過程で、あなたはきっと変貌を遂げるのです。

卒業論文を書くということは、知の受信者から知の発信者へと立場を変えることを意味します。たしかに、多くの時間とエネルギーとを費やして1つの問題に取り組むのは、辛く苦しいことでしょう。しかし、その結果として得られる喜び——そう、何ものかを発見し、何ごとかを表現しえたという喜びは、他のどんなものにも代えがたい喜びであって、数ヶ月におよぶあなたの呻吟を補って余りあることでしょう。

この喜びにとりつかれた学生は、大学院への進学をめざすことになるかもしれません。しかし、卒業論文を最初で最後の論文とする人にとっても、ひとつ大きな論文を完成させたという自信の効果は計り知れないのです。今まで受け身の形で接するばかりであった書物、取り組んでねじふせる対象でしかなかった思想が、実に身近な懐かしい存在になってしまうのはどうしたことでしょう。それがどのように書かれたものなのか、どのように積み上げられたものなのか——あなたは背後から書物や思想に接する視点を手に入れるのです。卒業後にいかなる進路をとるにせよ、この新しい視点は、あなたにとって大きな力となることでしょう。

卒業後の進路

最後に、文学部卒業後の進路について触れておきましょう。2つの誤った「神話」を捨て去っていただくことが必要です。

まず、文学部出身者は就職に不利だという「神話」。——もちろん、就職状況がとみに厳しくなっている昨今ですから、それなりの苦労はあるでしょう。卒業論文を抱えながらの就職活動もなかなか大変です。しかし、文学部の学問は社会で役立たないから就職に不利だというようなことがさ

さやかれていたのは遙か昔のことです。現在ではむしろ、さまざまな企業において仕事の多様化やソフト化が進む中で多くの新しい職種が生まれ、文学部の学生がかえって歓迎されるというケースも増えています。「護送船団社会」が崩壊しつつある今、求められているのは他人では代替のきかない個々人の個性的な能力なのであり、そのような能力を養成する場として文学部は恰好の場だとも言えるのではないのでしょうか。最近の就職状況の詳細については、このパンフレット巻末の「専修課程別進路状況」をご覧ください。

次に、文学部卒業生の大部分が大学院に進学するという「神話」。——たしかに、東大の文科系諸学部の中で、文学部は大学院進学者の比率が群を抜いて高いですし、これまでに日本の人文・社会科学の担い手となる多くの人材が輩出した文学部としては、これからも大学院に進学して研究者への道を歩む人材を育てることが大きな使命であることは間違いありません。しかしだからといって、大学院に行かない者が日陰者扱いされたり、疎んじられたりするということだけは決してありません。実際、大学院進学者は卒業生のうちの20%ほどで、多くの人は社会に巣立っていくのです。

たしかに文学部の学問は実学的な性格が乏しいですから、社会に出た卒業生がすぐに、文学部で学んだことが直接に役立ったと感じるようなことはあまり多くないかもしれません。哲学を専攻し、カントの『純粹理性批判』をテーマに研究したために、会社で得意先との交渉が円滑に進んだなどということはまずないでしょう。しかし、そこで身につけた、テキストを一語もゆるがせにせず綿密に読み、わずかな引っかかりを手がかりにそこに込められた奥深い含意を引き出してくる能力、そして今度は、それを大きな視野のうちにおさめることによって、名探偵さながらに時代や文化の全体像を解き明かしてゆく能力、そういう鋭い分析力や幅広い視点をそなえることによって、社会に出たとき、あなたの目に映る景色は確実に変わるでしょう。そしてそういう、他人には見えない景色がみえるからこそ、あなたはかけがえのない人材として社会で活躍できるのです。文学部を卒業した若者が社会に出てそのような形で新しい世界を開拓してゆく、そういう姿を見ることもわれわれ教員の大きな楽しみなのであり、多くの教員がそのために心を砕いて授業に臨んでいるのだということをどうか忘れないでください。